

ようにするべきだという。そして、もうひとつが「市民」と真剣に向き合うことである。それは、例えば科学的には誇張しすぎている内容を含む映画を観て、市民が不安を感じているという発言をしたときに、彼らを鼻で笑うことなく、「その映画のどこが誇張であって、本当の問題はどこなのか」ということについて丁寧に応えていくことである。また、市民から意見や質問を積極的に促すことも大切である。

しかし、バーリンさんは、市民の不安の多くが誤った情報や思い込みに基づいていることも指摘していた。そうした思い込みを解きほぐし、テクノロジーに関する現実的な予測に基づいて議論できるようにすることが重要であるといっている。また、テクノロジーに関する現実的な議論のためのアドヴァイスとして「なるほど」と思ったのが、あるテクノロジーの50年後を議論するのではなく、5年後を議論するようにするべきだというものがある。近い未来を設定することによって、科学者が実際に考えていることを知り、より現実的な議論ができるはずだ。

もうひとつ、バーリンさんはどんな意見も「聴く」ために「広い心 (open mind)」をであることに幾度か触れていた。しかし、広い心でいるのは素晴らしいに違いないが、どこまで寛容であるべきかという線引きはとても難しい。ともかく、聴くことに努めてみよう。

対話だけではなく

ここまで、デンマークのサイエンス・コミュニケーションの達人であるバーリンさんの実践哲学を紹介してきたが、彼は何もサイエンス・カフェだけをやっていくわけではない。例えば、彼が関わった“Future Body (未来の身体)”というプロジェクトのなかのプログラムは、新聞や雑誌、インターネットを複合的に利用した、一種のマルチ・メディア型サイエンス・コミュニケーション活動だ。“Future Body”は、コペンハーゲンのエクスペリメンタリウムという科学館に新世紀を記念して企画された予算規模が数百万ドルになる大規模の展示が土台となっている。バーリンさんが担当していたのは、主に新聞記事やチャットルーム、インターネット・サイトでの本や記事の説明である。このプログラムは、デンマークの著名な科学者が一般の人の質問に答える機会を設けるのが目的であった。

2000年の1年間、2週間ごとに著名な科学者による論争をよぶような記事を発行部数の多い全国紙に載せた。全ての記事は、読み手がその話題について考えられるよ

うなもので、記事がでた次の日にインターネット上でのチャットルームで議論ができるようにした。インターネット上でのチャットは、匿名であったのも手伝って、とても盛り上がった。同時に、チャットが混乱しないように議論を整理したり、悪質な参加者には退場してもらったりするモデレーターがいつも場を管理していた。また、より深い知識を得ながら議論をしたい人のために、長い説明記事や学術文献へもインターネットから読めるようにした。このように、博物館での展示と新聞記事とインターネットを結ぶことで、博物館に通う人たち、新聞を読む人たち、インターネットを見る人たち、という異なる層の人たちに情報を届け、かつ議論してもらうことを可能にした。

2001年に、このプログラムは終了したのだが、その後、バーリンさんは新聞に掲載された記事のなかから9つの記事を選んで編集しなおし、“Homo Sapiens 2.0 (ホモサピエンス 2.0)”というアンソロジーを編んだ。これはとてもよく売れた。さらに、デンマークでよく知られた研究者が沢山でてくるので、全国で放送されるラジオやテレビによく取り上げられたそうだ。また、新聞に載せていた記事も新聞社とデンマーク倫理委員会の経済的サポートによって再編集され、新しく“Future Body”という名前の特別新聞に生まれ変わり、3万部が刷られ、無料でデンマークのすべての高校に配られた。また、科学省に電話すれば、誰でも何部でも無料でその特別新聞を送ってもらうことができるようにした。このようにして、最初に書かれた記事が何度も、違う媒体を通して使われることによって大きなインパクトを持つことができた。

サイエンス・カフェと“Future Body”は、異なるプロジェクトであるが、それぞれの仕事にむかうバーリンさんの姿勢はほとんどブレがない。できるだけ多くの人に、科学技術に関わる面白い議論をしてほしい、という強い思いが伝わってくる。そして、いつでも市民の声を聴こうとしている。しかし、バーリンさんが指摘していたように、デンマークでうまくいっていることが、他の文化でうまくいくとは限らない。日本なら日本という文化に即したコミュニケーションがあるかもしれない。そういえば、インタビューの最後にバーリンさんは日本のサイエンス・コミュニケーション事情について、いくつもの質問をしてきた。しまいには、どちらがインタビューをしているのかわからなくなるほどだった。彼は、どこまでも「聴く人」である⁵。

5: 鷲田清一は「「聴く」ことのカー-臨床哲学試論」で「聴く」ことについての細かく深い議論をしている。